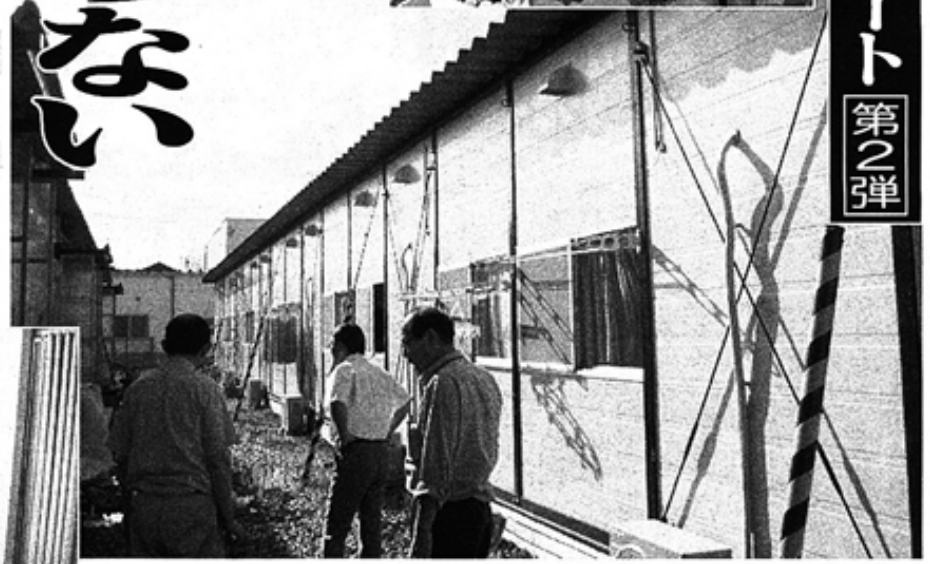
全介協会長の被災地リポート 第2弾

ハエやアリなど比べものにならない 仮設住宅の深刻な問題

先日、宮城県塩釜市の仮設住宅で79歳の男性が、誰にもみとられずに亡くなった。仮設住宅では今、何が問題なのか？　全国介護者支援協議会会長の上原喜光氏による被災地リポートの第2弾だ。



宮城県気仙沼市の仮設住宅に長い影の夕刻が迫る。80代女性は、下の部分が一部焼け焦げた夫の位牌を持ちながら、こうつぶやいた。

「これだけでした」

死者、行方不明者が1401人。被災家屋は市内だけでも1万2914棟を数える。女性の家も流された。連日、悪い体調を押して、避難所の体育館から避難品を保管している施設に通った。見つかった夫の思い出は、これだけだった……。

女性はあの日、長男と長女も失っている。

一人暮らしの老人にも布団4組支給

気仙沼市や石巻市の仮設住宅を視察した上原氏がこう言う。

「おとなしく、品のいい女性でした。彼女が住む仮設住宅の間取りは、2DK。押し入れには、支援物資の布団が4組。今後も使われないだろう布団を眺め、何だか切ない気持ちになってきました」

エアコン、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、電子レンジも無償提供。ただし、家電製品は最新型だ。

「使い方を理解できないお年寄りが、渡された取扱説明書と4時間も格闘している。これが町の電器屋さんなら、各種の設定をすべてやってくれた後に納品してくれたものですが」

仮設への入居が本格化してから、被災者の間では「物件による住み心地の違い」への不満も出始めている。

雨漏りがしたり、天井や床の隙間から大量のアリが入り込むケースもある。

また、国はプレハブ業者だけでは手が回らないため、一般の住宅メーカーにも建築を依頼。こちらは当然ながら、見た目も内装も「普通の家」だ。天井は高く、二重サッシも完備し、何より隣の人の声が聞こえない。

「ハエの異常発生が一時話題になりましたが、私が訪れた時は、強力な殺虫剤をまいた後で大丈夫でした。ところが、今度はボウフラがわいていた。学校のグラウンドに仮設を建てたため、地面が水を吸わない。床下などに水たまりができ、大量発生しているのです」

だが、仮設に住む人たちの問題は、もっと別のところにある。

「高齢者宅で〈いま何が欲しいですか？〉と聞いてみました。義援金か、車か……。しかし、ある一人暮らしのおばあちゃんは〈人と話がしたい〉とポツリ。仮設住宅では今、高齢者のひきこもりが深刻なのです。お年寄りは、積極的にコミュニケーションを取りません。しかも、気仙沼の場合は、海側と山側で住民気質も違い、なかなか簡単に打ち解けられない。

さらに仮設同士のムラ意識も芽生えてしまった。約150戸を1単位として、真ん中に集会所などがあるのですが、隣の仮設の住民が〈そちらの集会所を貸してください〉と言ってきても、貸さないのです。家の中でも孤立し、仮設同士でも孤立が始まっているのです」

東京直下型地震（マグニチュード7・3）も近いうち必ず来る。中央防災会議の想定では、倒壊12万棟を含む53万棟に建物被害が出るとされる。

「東北の人は、〈屋根が付いているだけで文句は言えません〉と殊勝に言います。東京の人は、どうでしょうか。プレハブの仮設住宅にしても、業者の本社はだいたい東京にある。会社に大被害が出れば、プレハブを造っている余裕もないでしょう」

首都圏の住民は我慢できるだろうか？